

武蔵野日曜聖書講筵

天然

——詩篇第104篇——

1976年12月5日

小池辰雄

神・キリスト・天然 神の生命の延長 自然の中の霊的な質 人間界には道德法則 天的然り
霊然の世界が本当の自由 「美しき天然」 靈法・自然法に従って生きる すべては神の霊的生
命の現れ 天地正大の氣 神の使者として生きる 「神・キリスト・我」という内接円 祈り

【詩篇104】

- 1 わが靈魂よエホバをほめまつれ、
わが神エホバよなんじは至大にして
尊貴と稜威とを衣たまえり。
- 2 なんじ光をころものごとくにまとい、
天を幕のごとくにはり
- 3 水のなかにおのれの殿の棟梁をおき、
雲をおのれの車となし風の翼にのりあるき、
かぜを使者となし、焰のいづる火を僕となしたもう。
- 4 エホバは地を基のうえにおきて、
永遠にうごくことなからしめたもう。
- 5 衣にておおうがごとく大水にて地をおおいたまえり。
水たたえて山のうえをこゆ。
- 6 なんじ叱咤すれば水しりぞき、
汝いかづちの声をはなてば水たちまち去りぬ。
- 7 あるいは山にのぼり或いは谷にくだりて、
汝のさだめたまえる所にゆけり。
- 8 なんじ界をたてて之をこえしめず、
ふたたび地をおおうことなからしむ。
- 9 エホバはいずみを谷にわきいだし給う、
その流は山のあいだにはしる。
- 10 かくて野のもろもろの獣にのましむ。
野の驢馬もその渴をやむ。



12 空の鳥もそのほとりにすみ
樹梢の間よりさえずりうたう。

13 エホバはその殿よりもろもの山に灌漑たもう。
地はなんじのみわざの実によりて飽足りぬ。

14 エホバは草をはえしめて家畜にあたえ
田産をはえしめて人の使用にそなえたもう。
かく地より食物をいだしたもう。

15 人のところを飲ばしむる葡萄酒、
ひとの顔をつややかならしむるあぶら、
人のところを強からしむる糧ともなり。

16 エホバの樹とその植えたまえる
レバノンの香柏とは飽足りぬべし。

17 鳥はそのなかに巢をつくり
鶴は松をその棲とせり。

18 たかき山は山羊のすまい、
磐石は山鼠のかくるる所なり。

19 エホバは月をつくりて時をつかさどらせたまへり。
日はその西にすることをしる。

20 なんじ黒暗をつくりたまえば夜あり、
そのとき林のけものは皆しのびのびに出きたる。

21 わかき獅ほえて餌をもとめ
神にくいものをもとむ。

22 日いづれば退きてその穴にふす。
23 人はいでて工をとり

その勤労はゆうべにまでいたる。
24 エホバよなんじの事跡はいかに多なる。

これらは皆なんじの智慧にてつくりたまへり。
汝のもろもの富は地にみつ。

25 かしこに大いなるひろき海あり。
そのなかに数しられぬ匍うもの
小さな大きな生けるものあり。

26 舟そのうえをはしり
汝のつくりたまえる鰐そのうちにあそびたわむる。
27 彼ら皆なんじを俟望む。



なんじ^{よきとき}宜時にくいものを之にあたえたもう。

28 彼等^あはなんじの予えたもう物をひろう。

なんじ手^{みて}をひらきたまえばかれら^{よきもの}嘉物にあきたりぬ。

29 なんじ面^{みかお}をおおいたまえば彼等はあわてふためく。

汝かれらの氣息^{いき}をとりたまえば

かれらは死にて塵にかえる。

30 なんじ^{みたま}霊をいだしたまえば^{すべてのもの}百物みな造らる。

なんじ地のおもてを新^{あらた}にしたもう。

31 願くはエホバの栄光とこしえにあらんことを。

エホバそのみわざを喜びたまわんことを。

32 エホバ地をみたまえば地ふるい、

山にふれたまえば山は煙をいだす。

33 生けるかぎりはエホバに向かいてうたい、

我ながらうるほどはわが神をほめうたわん。

34 エホバをおもうわが思念^{おもひ}はたのしみ深からん。

われエホバによりて喜ぶべし。

35 罪人^{つみびと}は地より^{また}絶滅^{たえほろぼ}され、

あしきものは復^{また}あらざるべし。

わが^{たましひ}靈魂よエホバをほめまつれ、

エホバを讃^{ほめたた}称えよ。

●神・キリスト・天然

今日は詩篇104篇です。これは102、103、104とちょうど三部曲のようになっていきます。非常にどれも著しい内容で、今日は一番長い詩ですが、「天然」と題しました。102篇は地獄ないし煉獄的な現実で、103篇は福音的な天国的なもの、104篇は神・キリスト・天然というところ、その天然になるところです。

第1節は、もちろんこの第104篇全体の最初の大きな響きであります。

1 わが^{たましひ}靈魂よエホバをほめまつれ、

わが神エホバよなんじは^{いとおおき}至大にして^{とうとぎ}尊貴と^{みいつ}稜威とを^ぎ衣たまえり。

「エホバをほめまつれ」というのは、

「エホバに恵みを帰せよ」

ということ。ヤーヴェーの神は恵みの神である。「バーラック」というヘブライ語がそういう字です。

「靈魂」というのは「ソール」(英)、「ゼーレ」(独)。自分の心と魂とを渾然としたような字です。



特に偉大だと書いてある。「至大」^{いとおお}と古い文語訳の聖書にありますが、たいへん結構な訳だ
と思います。「ガードール」という字です。しかも、大いに非常に偉大である、絶大である
という。尊貴^{とうき}、栄光ですね。それから稜威^{みいつ}、權威です。栄光と權威がある。英語でいうと、「グ
ローリー」と「マジエステイ」。それを衣としている。

この詩篇は具体的な表現でもって大胆に――旧約はそういう表現がなかなか多いですけ
れども――非常に活き活きとした詩篇です。観念的なものではない。

「尊貴と稜威を衣としている」^{とうき みいつ}

という。まあしかし、坊さんの袈裟みたいなものはあまり考えない方がいい。むしろ、「栄
光と權威」と訳した方がいいですね、私たちにははつきりする。栄光と權威を衣となしたと。
この第1節が、いかに神が偉大な方であり、栄光の主体であり、また權威の主体であるか
ということです。

そのように、わが靈魂に恵みある神である。それが至大にして栄光と權威が実は、内容
は恵みであるという。「ほめる」という字が「めぐみ」という字と同じですから、

「恵みをエホバに帰せよ」

という訳し方がいちばん内容的にははつきりする。神さまはただ威張っているのではない。
神さまの偉大さと、それから栄光と權威が恵みそのものであるという、

「恵みを衣する」^き

という素晴らしい一句です、この第一句は。

2 なんじ光をころものごとくにまとい、

天を幕のごとくにはり

3 水のなかにおのれの殿の棟梁^{うつばり}をおき、

雲をおのれの車となし風の翼にのりあるき、

4 かぜを使者^{つかい}となし、焰^{ほのお}のいづる火を僕となしたもう。

「風の翼にのりあるき」なんてのはいい言い方です。ここを読んでもすぐ気がつきますか。水・
火・風――地水火風といえますね――そのうちの三つが出ている。四大という。四大を自
在に使いたもうと。車としたり、それから使いとしたり、僕としたりと書いてある。

5 エホバは地^{もとい}を基^{もと}のうえにおきて、

永遠^{とこしえ}にうごくことなからしめたもう。

2節から4節はだいたい空界、天界のことです。それから5節から9節までがだいたい
地界のことになっている。天界と地界。詩人はなにもそんな分類して書いてあるわけでは
ないでしょうけれども、自然にそうなっている。5節にみると、今度は地になる。これが
まさに「地水火風」です。雲といい、風という。これもこの中に入ってしまう。風雲という。
普通は、「地水火風」なんてことをいいますと、なにも神さまのことを考えない。ところが、
この詩人は、どこまでもこれは神に密着したもの、神の手足みたいなもの、非常に自然と



いうものを——だから、私はむしろこれを「天然」といいたいんですが——

「^{おの}自ずから然り」

でなくて、

「天的に然り」

という。即ち天は、

²なんじ光をころものごとくにまとい、天を幕のごとくにはり

でしょ。「天」と言つて、それから「光」と言っている。「天光」なんていう言葉もあるけれども。この地水火風の「火」にもまた「光」は通じます。そういう、神さまのいちばん本質的な現れ方という、やはり光なんです。

「神、光あれと言ひ給いければ光ありき」(創世記1・3)

という、最初にこの創造の事態は光をもっている。また、天的冥想の世界でも、いちばん出てくるのはこの天的な光ですから。神の属性なんです、要するにこの地水火風は。

●神の生命の延長

「被造物」という言葉がありますけれども。造られたるもの、まあそれは被造物に相違ないんだけど、「天然」という。「被造物」というと、なにかちよつとするとこの「物」という言葉にこだわって、物的な感じになるけれども、「天然」はむしろ神の生命の延長です。そういうようなことを神秘家はよく言います。そして

「エマナツイオン」(Emanation)「流出」

という言葉を使います。ああいう神秘家の表現をただちににいか危険のように言う人たちがありますけれども、そんなことはないですよ。神さまの栄光というものを具体的に表現しようとする、どうしても神の生命の延長として——「造られた物」といったって、神さまの生命がそこに発動しなければ、造られるということはないんですから——それを「生命の延長」といつて何もわるくはない。

そういう意味で、我々がこの大自然、天然を体験し、見たり聞いたりする。その世界はもつと神の生命の現れとして、これを体感すること。からだに感ずること。これが非常に大事なことです。その自然を人間中心にして勝手に使うから公害現象が起きる。神のものとして尊重しないから。

だから、自然に対するところの本当の角度は、

「これは神のものである、天地万物これ神の有^{もの}である」

と。神有なんです。神のまた生命の延長である。そしたら、これを害するわけにいかない。それとむしろ融合し連なる。今の文明人の健康が損なわれているのは、実はそういった根本観念の誤りからきている。

ですから本当は、あるがままの自然のものをあまり料理しないで食べるのが一番いい。



あまり料理すればするほど、生命的なものはどうかなってしまふ。自然の味というのは、まあいろんなお菓子やなにかを食べても、結局、人間のつくったものは終いには飽きる。ところが、やはり焼き芋だとかなんとかいいうものは飽きない。お煎餅せんべいあたりもそうとう自然に近いでしょうから。焼き芋だのお煎餅せんべいというのが飽きないのはやはりその元に近いから。近頃は石焼き芋なんてやっているが、ああいうのはおおいに尊重しなくてはいいかん。敬意をはらって買わなくてはいいかん（笑）。

そういう気持ちになると、非常にこの天然を見ることが楽しくなるし、見ているうちに生命がくる。

4 かぜを使者つかいとなし、焰ほのおのいづる火を僕となしたもう。

なんてな言い方ですね。全く神中心に、そして自然を神のむしろ表現として、自然において神を見るくらいのこと。そういった自然において神的な事態を見るというような角度の素晴らしかったのは詩人ゲーテです。ドイツの最大詩人ゲーテ。ゲーテという人は本当に神・自然というものを融合してつかんでいた人です。

●自然の中の霊的な質

5 エホバは地を基もとのうえにおきて、

永遠とこしえにうごくことなからしめたもう。

6 衣にておおうがごとく大水にて地をおおいたまえり。

水たたえて山のうえをこゆ。

大洪水、山津波のことを言っている。

7 なんじ叱咤すれば水しりぞぎ、

汝いかづちの声をはなてば水たちまち去りぬ。

8 あるいは山にのぼり或いは谷にくだりて、

汝のさだめたまえる所にゆけり。

そういう天然現象ですね、どこまでもそういった神の力の中にあるものとして見ているわけです。

「昔の人は自然科学的な知識がないから、そうすぐ思うのだろう」

と、だいたいそう判断する。それも一理はあるでしょう。けれども、もうひとつ奥へはいると、単に神話的にそう思っているのではなくて、この自然は本当は自然の中に霊的な質がある。このことを深く見たのがヤコブ・ベームという人です。17世紀の人です。

ドイツの神秘家に、エックハルト、タウラー、ゾイゼ、それからベームの四人がある。エックハルト、タウラー、ゾイゼは宗教改革の前の、中世の神秘家ですけれども、ベームはマルチン・ルッターが出てからあと。それでベームの信仰の中心にやはりルッター的なものがある。「ピエティステン」「敬虔派」（敬虔主義、独：Pietismus）の中の一人でもあります。



敬虔派の中でもこれはちよつとケタがちがう。ちようどその頃にフランスには有名なパスカルが出た。パスカルとベーメはちよつと型破りの17世紀のひと。ベーメは非常に自然に融けている魂です。パスカルの方は人間の心の世界の非常に深い把握の仕方をした人です。

⁹ なんじ界をたてて之をこえしめず、

ふたたび地をおおうことなからしむ。

ヨブ記にも似たような言葉があります。ヨブ記38章10節以下に。有名な言葉がある。ヨブ記38章はおもしろいですよ。

「ここにエホバ大風の中よりヨブに答えて宣まわく、² 無智の言詞をもて道を暗からしむる此者は誰ぞや。……

云々と。そして神さまはいろいろ問いかけていらつしやる。11節に、

¹¹ 曰く此までは来るべし此を越べからず汝の高浪ここに止まるべしと。」(ヨブ

38・1…11)

とは、今の詩篇の言葉と似た言葉です。31節、

「³¹ なんじ昴宿

星座のスバル座です、

の鏈索を結びうるや。参宿

オリオンのあの三つ星のこと、

の繫繩を解きうるや。³² なんじ十二宮

黄道十二座、水瓶座とか、たくさんあるでしょ。太陽の道をいくやつですね、こっちから見ると。

をその時にしたがいて引きいだし得るや。また北斗とその子星

北斗七星の大遊星と小遊星です、

を導びき得るや。」(ヨブ38・31〜32)

そういうように、空を観察して、これはみな神さまがちやんここういうように配置しておられると。それを結んだり解いたりすることができると。天然現象の、物理的にいえば素晴らしい法則の世界を文学的に詩的に表現しているわけです。聖書というのはもの凄いドラマです。このドラマはしかも非常に詩文が多い。自然にそうなる。『芸術のたましい』の中にも書いておきました。キリストの山上の垂訓も、あれは詩ですからね、波のように。それから今度は、10節から18節くらいがまた一段になっています。いろんな生命、生き物、また植物のことが書いてある。

¹⁰ エホバはいずみを谷にわきいだし給う、

その流は山のあいだにはしる。

¹¹ かくて野のもろもろの獣にのましむ。

野の驢馬もその渴をやむ。



12 空の鳥もそのほとりにすみ
樹梢の間よりさえずりうたう。

13 エホバはその殿よりもろろの山に灌漑たもう。
地はなんじのみわざの実によりて飽足りぬ。

14 エホバは草をはえしめて家畜にあたえ
田産をはえしめて人の使用にそなえたもう。
かく地より食物をいだしたもう。

これは植物のこと。それから、

15 人のところを飲ばしむる葡萄酒、
葡萄酒はみんな飲ぶ。

ひとの顔をつややかならしむるあぶら、
香油、オリーブです。葡萄酒の方は男性、あぶらの方は女性のはなしでしょうけれども。
人のところを強からしむる糧どもなり。

16 エホバの樹とその植えたまえるレバノンの香柏とは飽足りぬべし。

「レバノンの香柏」というのは非常にイスラエルの象徴的なものです。

17 鳥はそのなかに巢をつくり鶴は松をその棲とせり。

目に浮かんでくるようですね、こんな言い方をする。

18 たかき山は山羊のすまい、磐石は山鼠のかくるる所なり。

活き活きと情景が浮かんでくるようです。そこまでは、地上のそういった動植物、また人間を豊かにしてくれるもの。

それから19節から23節、今度は月と日のことが書いてある。

19 エホバは月をつくりて時をつかさどらせたまえり。

日はその西にすることをしる。

創世記の第1章を、神の創造のわざをもつと詩的に表現しているようなものです、この104篇というのは。あそこは創造の過程ですが、それをもつと現在という立場から、今見ることがとくに表している。

20 なんじ黒暗をつくりたまえば夜あり、

暗黒さえも、「黒暗をつくる」というような言い方をしている。

そのとき林のけものは皆しのびしのびに出きたる。

猛獣が餌をあさったり、ふくろうみたいなのやつが活躍している時だな。

21 わかき獅ほえて餌をもとめ神にくだいものをもとむ。

獅子が餌を求めるのも、

「神さまにくだいものを求める」

というように非常に珍しい表現をしている。彼らは自分のお腹がいっぱいになると、もう



あと餌になるようなのがそこに歩いていても、食べようとしない。本能で生きていますから、欲で生きないから。人間はむしろ動物よりかな悪いところがある。動物の生き方にはやはり、本能的な自然さがあるわけです。だから、自然界にはちゃんと自然の法則がある。それが植物の世界でも、動物の世界でも。だいたい彼らはそれを本能的な角度でもって動いているわけです、動植物は。

●人間界には道徳法則

今度は、人間界には道徳法則。道だ。道法といったつていい。道徳律、道徳法。

「人はかくあるべし」

という。「べし、べからず」という法則。

「べし、べからず」

というようなことになっているところに、人間には自由があるからです。こちら（動植物）も自由はもっているけれども、彼らの自由はもう本能的自由なんです。本能的自然さ、本能的自由。人間の方の自由は、本来、人間の自由は――カントに言わせると――道徳法則はちゃんと先験的に神さまからいただいている。その道徳法則に自然に従っていけば、自然に従うところが本当の自由なんです。道徳法則に自然に従っている。ちょうど物理的法則に自然に従っている彼らの本能的な世界がこの自然界なんだけれども。大したもんですよ、これは。動物だって多少、意識だってあるけれどもね。

ところが、人間はこの賜つているところの道徳法則に従わなくなってしまった。それが例の「罪」ということになる。その道徳法則を破るから。何が破っているかというところ、

「自我」

というやつが破っている。罪が破っているのではない。自我というやつが罪の主体だから。この自我が罪の主体で、自由を私するから、そこでこの自由が実は不自由になる。ここが破れてしまう。

それから霊界、神界、ここには

「靈法」

がはたらいている。奇蹟なんてのはありはしない。奇蹟ではない。あれはみんな靈法がはたらいている。

ところで、人間を人間として考えて、神さまぬきにやって、人間本位なのが今の民主主義というやつ。私は大嫌いなんだ、民主主義なんて。まちがっているから。「民主主義」という言葉は本来は大事な内容をもっているんだけど、今の日本人が使っている民主主義なんてダメです。

人間は、申し上げているとおり、

「靈止^{ひと}」



なんだから霊が止ま^{とど}まっている。神霊の止ま^{とど}まっているのが霊止^{ひと}で、神さまに創られている。これも創られている。自然界も神さまの、今この詩篇にあるように、被造物です。人間は被造物の最たるものです。最たるものがなぜ、これと質的に違うかと。ダーヴィンの法則で必然的に人間になったのではない。この自然界と人間は質的に違ったものがある。それはもちろん上からきているから。ある意味においては、共通です。ある意味では共通ですけれども、ちよつと次元的に違う。次元的に違うのは、神さまの霊が人間にはいただいてある。神霊が止ま^{とど}まっている「霊止^{ひと}」ということ。

ところが、神霊が止ま^{とど}まっているのに、それを自覚しないで、この自由を私して使った。神さまの言うことを聞かないで、相対的な自分を絶対的なものにしてしまつて、自由にやっている。これが大間違い。これが切れてしまった。神との結びが切れてしまった。「宗教」は、結び返しという

「再結」

という言葉だと申しましたね。再結の事態が切れてしまった。だから、もういつペン結び返しをしなくてはいいかん。

●天的然り

本来、人間の中心は、

「土から創った人間に神は氣息^{いき}を吹き入れた」

とある。地的な要素に天的な要素が入っている。だから、人間こそ本当は天然でなければならぬわけです。天の法則が入って、天的然りが人間の本当の姿なんです。神さまに

「然り、はい」

と言つて生きていたひと、正にキリストは天然人なんだ。キリストは天然人。神さまに「然り」と言つて、

「我がこころにあらず、汝のこころを」

といつて、神の霊的な意志に向かつて「然^{しか}り」と言つた。自分を、自我というものを「否^{いな}」とした。

「自分は何も言えませんが、何もできません」

と彼は言っている。

「なぜ、私のことを善いというか。神さまの他に善いものはない」

と、キリストははつきり言っている。だから私は、彼は自分を何ものともしないから、

「無者」

と申し上げているわけです。キリストという無者、これが本当の天然人。神然^{しんぜん}といったつていい。

「天然、神然、靈然」



どれでもいい。「然」というのは素晴らしい言葉だね。

天然、神然、靈然たるところのひとはキリストでありました。自分の自由なんてものを問題にしなかったら、今度は本当の彼は自由人であった。本当の自由人というのは、靈法に即している。即靈法の世界。だから、彼の言うこと、することがケタちがい自然なんです、天然なんです。

キリストの言葉はたくまざる言葉です、たくまざる業です。みんなと次元の違ったことを、湖の上でも涉って行ってしまう。自然法則をなお超えた靈法の世界だから。だから、これは死んでも死なないんだ、キリストなんていう人は絶対に。十字架は贖罪のために死んだんだから。贖罪のために彼はいつペン身を捨てただけけれども、これは必ず甦える。靈然の世界に自分を^{あらわ}顕す。

「キリストの復活はどうだ、こうだ」

と、そんなことを問題にしたり、研究する必要はひとつもない。はつきり、彼は復活せざるを得ない。靈的な実存として顕れざるを得ない。でなかったらもう、神はないと言ったらしいです。パウロが、

「キリストがもし甦えなかったら、我々の信仰はむなし」
と言ったのがそのことです。

「まあ聖書に書いてあるから、キリストの復活を信じておきましょう」

なんて、そんなものは信仰でも何でもありません。もうね、聖書の現実は表現しきれないんです。聖書の言葉自身も、マルチン・ルッターが

「聖書は破れの言葉だ。かけらだ」

と言った。そのとおりです。ルッターは「神の言、神の言」といって、神の言葉を非常に強調したのだから、プロテスタントが

「^{みことば}聖言、聖言」

といって、言葉に今度は執着してしまつて、身動きもならない。冗談じゃないよ。ルッターさんは、

「聖書は、神の言葉はかけらだ、限らないんだ」

と。ヨハネ伝にもあるとおり、

「キリストの言ったりしたりしたことは、もつと書き出したら、乗せきれない」

と言っている。聖書の言葉はみんな暗号ですよ。その奥の根源の事態や、根源の言葉が読めてこなかったらしょうがない。

●靈然の世界が本当の自由

そういう靈然の世界。神靈の本当にはたらいっているところが私たちの自由なんだ。もう「すべし、すべからず」



なんていう世界は越えてしまっている。ざるを得ないんです。かくあらざるを得ないという。雨が降れば地は濡れざるを得ないように、「ざるを得ない」という、

「ノー・アザー・キャン・アイ・ドゥー」(No other can I do.)

「その他に私はしようがありません」

という言い方がある。

「こうしようか、ああしようか」

なんて、そんな選択の世界ではない。それは本当に捨ててかかれ。そうしたら、神さまの世界で自由に動けるようになるという。ものの判断はそこからくれば、もう誰に何と言われようと大丈夫です。それは御霊がこなければそうなりませんよ、いわゆる「自分の信仰」なんて言っているうちは。だから、私は、

「信仰にも絶しなさい。信仰も私したらダメですよ」

と言っている。

「私は何もありません。神さま・キリストのほかには何もありません」

というのが一番いいんだ。

自然は、そういった神さまに創られた本能的自然の世界。部屋の中は風がないから、ゴムの木(室内の観葉植物)の葉がちつとも動かない。これも息をフーツと吹きかければ、これは動く。そういうように、

「お前は吹いたけれども、俺は動かないよ」

と言わないんです。ちゃんと自然の法則に従って、楽に曲がってはまた元に戻る。

この自然の姿を見ていたら、同じ無色の光を受けても、こつちの花は赤くなったり、あつちが黄色くなったりする。

とにかく、天を中心としたところの「然り」の世界。これは動物界も人間界も植物界もそうです。「天」という言葉をもつて表されるところの神です。まさに天神さまなんだ。天神さまを——あの「天神さま」(天神信仰)ではないけれども——天の神さまを自然界も、人間界も、然りとして歩く。そうすると、植物を見ていても、活き活きとした植物を見ていれば、見ているだけで生命がくる。それくらいの秘訣を身に体しなければダメですよ。あとは水を飲んでいればいい。それくらいのことをいっぺんやってみてください。私も断食して、経験して知ってますから。

●「美しき天然」

私はそういう意味で、あの「美しき天然」(作詞：武島羽衣／曲：田中穂積)が好きなんだ。

「空にさえずる鳥の声」

みね 峯より落つる滝の音

大波小波とつとつと

響き絶えぬ海の音

聞けや人々面白い

こ 此の天然の音楽を。



調べ自在に弾き給う

神の御手の尊しや。」

と。この作者はちゃんと天然の事態を

「調べ自在に弾き給う 神の御手の尊しや」

とうたっている。素晴らしいですよ。これは武島羽衣という人だ。この詩は九州の天草の方の高いところの山から眺めた時の感興によって作ったそうです。

「春は桜のあや衣、

秋は紅葉の唐錦、

夏は涼しき月の絹、

冬は真白き雪の布。

見よや人々美しき

此の天然の織物を。

手際見事に織り給う

神のたくみの尊しや。」

「つす墨ひける四方の山、

くれない匂う横がすみ、

海辺はるかにうち続く

青松白砂の美しさ。

見よや人々たぐいなき

此の天然のうつしえを。

筆も及ばずかきたもう

神の力の尊しや。」

「朝に起る雲の殿、

夕べにかかる虹の橋。

晴れたる空を見渡せば

青天井に似たるかな。

仰げ人々珍しき

此の天然の建築を。

かく広大にたてたもう

神の御業の尊しや。」

全部、天然現象をまさにこの詩篇104篇の詩人と同じように、羽衣さんは——この人はクリスチャンかどうか知らんけれども、どうもそうらしいね——歌った。私はこの懐かしのメロディーが大好きなんだ。

●霊法・自然法に従って生きる

そういう気持ちでもってひとつ行ってください。日本は特に春夏秋冬、非常に天然がうるわしいですから。日本人は本当は芸術の美の民なんだ。「美」という字は素晴らしい字だね。とにかく漢字は素晴らしい。私は、漢字は世界最高の文字だと思っている。漢字制限なんてとんでもないはなしだ。今の若い人はもつと漢字をしっかり勉強して、漢字にこもっているところの精神をつかまなくてはいいかん。変てこな略し方をしたらダメですよ。意味が混乱してしまう。今の中国もそれをやっているらしいが、あれはいかんよ。

もうとにかく、人間は、現代人は古典に帰らなければダメです。自然科学はいくら進歩したっていい。ところが、精神的な方面が完全に退歩してしまつて、もう非常にちぐはぐになってしまっているから、20世紀は今にひっくり返ってしまう。ノストラダムスの予言の通りになってしまう。ノストラダムスなんていうのはゲーテもちゃんと知っていました。

21 わかき獅ほえて餌をもとめ神にくだいものをもとむ。

22 日いづれば退きてその穴にふす。



23 人はいでて工^{わざ}をとりその勤勞はゆうべにまでいたる。

昔の人は、お天道さんと一緒に起き上がって、お天道さんが沈むと休んで寝てしまう。これもやはり自然なんだよね。人間はそういった靈法・自然法に従って生きていけば、これはもう百を突破するのは当然だそうですよ、医学的にいいまでも。ところが、百までなかなかいかない。これはいかにその法則からそれて破っているか。違っているか、間違っているか、犯しているか、ということですよ。

「百二十歳で死ぬるもなお若しとせらる」

なんてイザヤ書に書いてある。だから、どうぞ皆さんはぜひともその角度で生きてください。まあお酒は飲んだっていいさ。けれども、それはみんなやはり法則に従わなくては。タバコはあまり感心しないがね。私は全然呑まないけれども。

それから24節から26節。

24 エホバよなんじの事跡^{みわざ}はいかに多^さなる。

これらは皆なんじの智慧にてつくりたまえり。

汝のもろもろの富は地にみつ。

25 かしこに大いなるひろき海あり。

そのなかに数しられぬ^は匍^はうもの小さな大きな生けるものあり。

26 舟そのうえをはしり

汝のつくりたまえる鰐^{わに}そのうちにあそびたわむる。

この詩篇の作者の自然の観方は、ローマ書8章のパウロのとはちよつとちがう。パウロもやはり自然を見ました。けれども、彼は自然における呻きを感じた。これは人間の罪のために自然界にもまた呻きがききました。やがてそれが贖われる時を待つという。これは新約の世界から、人間の罪の世界が自然をも損なってしまったから、そこで自然におけるところの呻きをパウロは見た。ところが、旧約の世界では、そのキリストの啓示がまだ来てません。だから、直接的に自然というものを非常に讃美している。自然を非常に明るくみているわけです。

●すべては神の靈的生命の現れ

イザヤ書の11章6節から9節、

「6 おおかみは小羊とともにやどり、豹は小山羊とともにふし、^{けだもの}犢^こおじし肥^{こえ}たる家畜^{けだもの}ともに居りて、^{とも}ちいさき童子^{わらわ}にみちびかれ、^{しし}7 牝牛^{めうし}と熊^{くま}とはくいものを同にし、熊の子と牛の子とともにふし、^{ちのみこ}獅^{しし}はうしのごとく藁^{わら}をくらひ、

⁸ 乳児^{ちのこ}は毒蛇^{ちのくさ}のほらにたわむれ、乳ばなれの児^こは手をまむしの穴にいれん。

⁹ 斯^{かく}てわが聖山^{きよきみやま}のいずこにても害^{そしな}うことなく、傷^{やい}ることなからん。

非常に平和なすがた。これはルーベンスがこういう絵を描いています。



そは水の海をおおえるごとく、エホバをしるの知識地にみつければなり。」
(イザヤ11・6～9)

と。神の霊のことが畳みかけて書いてあるでしょ。そういう終末的な樂園の世界を、パラダイス・ロストから樂園の世界をここに書いてある。もちろん、旧約の世界でパラダイスから追放されたことはちゃんと彼らは知ってますから。それで、救われた時にはこうなるという。ですから、旧約においても、自然界がいかにまた悲惨な面もあるかということも知っている。けれども、詩篇104篇ではそれが直接的に神さまの栄光の現れとして明るくとらえているわけです。

それから27節から30節のところは、いろいろ善きものが与えられる。

27 彼ら皆^{まぢのぞ}なんじを俟望^{よきとき}む。

なんじ^み宜時^{よきとき}にくいものを之にあたえたもう。

28 彼等はなんじの予^{あた}えたもう物をひろう。

なんじ^み手^{みかお}をひらきたまえばかれら^{よきもの}嘉物^{よきもの}にあきたりぬ。

29 なんじ^み面^{みかお}をおおいたまえば彼等はあわてふためく。

汝^いかれらの氣息^{いき}をとりたまえばかれらは死にて塵にかえる。

30 なんじ^み霊^{たま}をいだしたまえば百物^{すべてのもの}みな造らる。

なんじ^{あらた}地^{あらた}のおもてを新にしたもう。

この30節がまた力強い言葉です。自然の中の儂^{はかな}さを彼らもちろん知っている。

「花は萎み枯れ、人もまたその如し」

なんていう面もありますけれども、ここのところでは、「新しくしてしまう」という。

「なんじ^み霊^{たま}をいだしたまえば百物^{すべてのもの}みな造らる」

という。

「万象は神の息によって成る」

という言葉がヨブ記の中にもある。ヨブ記33章4節、

「4 神の霊^{いき}われを造り全能者の氣息^{いき}われを活かしむ」(ヨブ33・4)

とある。32章8節にも、

「8 但し^{うち}人の衷^{うち}には霊あり全能者の氣息^{いき}人に聰明^{さと}を与う」(ヨブ32・8)

と。それから詩篇33篇6節に、

「6 もろもろの天はエホバのみことばによりて成り、てんの万軍はエホバの口

の氣^{いき}によりてつくられたり」(詩篇33・6)

とある。霊、ルーアツハ、神さまの言、神さまの息、みんな同じことです。霊言だから。

「神の霊言によって万象は創^{つく}られる、成る」

という。だから、創られたるものも——これはローマ書11章に書いてあるとおり——神によつて創られ、神によつて保たれ、また神に帰するという。万象帰神だね——「帰神」な



んていう言葉はないかもしれないけれども——神に帰するんです。「神に帰する」ということは、最後の新天地のことをいうわけです。

すべてを神の霊的生命の現れとしてとらえていく。これが非常に大事なこと。物はないんだよ、いわゆる物は。近代人が考えているいわゆる物ではない。どのような物もみな物理的にいったってそうでしょ。こういう物だってみんな原子、電子ということになってしまうでしょ。その原子とか何とかという最後の物理的な構造も素晴らしいところまで物理の世界では展開しているんだが、しかし、それは私に言わせると、これは

「れいし霊子」

なんだ。神の霊のアトム。分解することのできないものがアトムでしょ。これ以上分解することのできない一番元の元素的なもの。それは質からいうとみんな霊子だというわけだ。原子や電子は霊子なんだ。人間を構成しているところの事態はもの凄い本当は霊子なんだ。人間の頭なんていうものは大変なものだ。神さまの創造の中でいちばん素晴らしいのは、この人間の頭脳でしょうね。いくらコンピューターがあつたって、人間の頭にはかなわない。人間の頭の構造をコンピューターで展開すると、丸の内のビルディングくらいなものが必要だという。親指一本の原子エネルギーを使ったら、軍艦ひとつを動かせるという。そういうものの凄い私たちは神の霊子で、人間の存在の中心は何といつても神霊なんだ。

「山川草木 ことごとおつしやう 悉く仏性あり」

と、仏の性があると仏教の方では言うでしょ。時々引用するブレイクの詩もそうです。

「二粒の砂に宇宙を見る」

という。ということとは、一粒の砂に宇宙と同質なものがあるということです。

「野草に天を見る。」

お前の手の掌に無限をつかめ。

有限の中に無限をつかむ。

一刻に永遠をつかむ」

という。一日は即ち千年である。一瞬間は即ち一日である。一日は即ち一生である。ですから、いわゆる有限的な相対的な時間の長短ではない。現在において、現在を永遠化する。現在において永遠を生きる。もうこの他に生き方がない。そういう生き方をする人は、現在において永遠を生きることはいかにして可能であるか。神さまの霊の生命をいただくときにこれが可能であります。キリストのいのちを、キリストの霊のいのちをいただく。聖霊が宿るときに、現在は永遠の今である。いつぶつ倒れてもアーメン・ハレルヤというわけです。未完成の完成という。未成交響楽。三日月は即ち満月であるという。即満月なんです、質がきているから、即満月です。



●天地正大の氣

私は非常に好きなのは、藤田東湖の「正大之歌」です。あれは天然を靈然の角度、まさに神靈の角度から藤田東湖は言いました。

「天地正大の氣」

粹然として神州に鐘る。

秀でては不二の嶽と為り

巍々として千秋に聳ゆ。

注いでは大瀝の水と為り

洋々として八州を環る。

発いては万朶の桜と為り

衆芳与に儔ひ難し。

凝つては百鍊の鉄と為り

鋭利兜を断つ可し。」

これは天地正大の氣が、現れては富士山となったり、開いては万朶の桜となったり、凝つては百鍊の鉄となったという。こんな愉快な詩はないですよ。どうして、今の人はこういう詩に感激しないのだろうかね。

私はこういうのを読んでいるともう、ウワーツと生命がきてしまう。それでくたびれないんです、私は。だいたいね、

「もう疲れてしまった」

なんていうことをほとんど言わないんです、私は。「眠くなった」ということは言うよ。それで眠る。でも、「疲れた」という言い方はしないんだね、正直。今は、若い人と歩いたって、だいたい負けないですよ。どうしてこうなんだろうというと、これは天地自然の氣と一つとなつて生きているからです。

もちろん、キリストです、キリストの靈です。そういうことを言うのと、

「少しあれはおかしくなった。神秘家みたいになつてきた」

なんて言う。そうじゃないよ。どうして、いわゆる教会や無教会の人がそういう下らないことを言つてらっしゃるか。

学校の先生方をみても、惜しいなあと思うんだよね。みんな一生懸命なんだけれどもさ。どうして、いちばん根底のことをつかもうとなさらないか。私の本をみんな買われたけれども、私に食いついてくるのがいないものね。情けなくなつてしまう。

●神の使者として生きる

今は、私は著作集の方が忙しいけれども、まだまだそう簡単に死なないつもりですから。神さまは、使命がある者はどんな患難を突破してもお使いになるから。



皆さん、生きることは即ち神の使者^{つかい}として生きることですよ。その時に張りがある。東大生なんていうのは、それがなかなか分からない。私は十何年も東大でやってきたけれども、なかなか飛び込んでこない。あたまばかりだ。あたまの人間でなくて、魂の人間にならなくては。そのことはいくらでも私は言っているのに――東大の悪口を言っているわけでもないけれども――まあいちばん悪口を言いたいのは、先生なんです。小学校から大学に至るまで。私も含めまして。

「先生」は、先に生きているだけではダメなんだ、先に醒^{めざ}めなければ。本当に「先醒^{せんせい}」とならなければ。こつちの先生はただ生きているだけ。この生きているのも本当にキリストに生きているのならいいけれどもさ。魂の教育を小学校から大学に至るまでしないから、

「若いのがどうだ」

なんて言えないんですよ。

「それはお前（先生）たちの責任ではないか」

「はい、さようでございます」

と、我々の責任なんだ。だから、私は教育界にいる限りは、言いたいことを叫んでいます。哲学者は本当の哲学をしたらば、それを言わなくては。文学者が本当の文学をしたらば、それを言わなくては。

今度の『芸術のたましい』（著作集第二巻）に書いてあります。第一流の人物はみんな霊的であつた。あなた方も一流の人物なんですよ、御霊が来ていれば。器の大小はいろいろです。けれども、質的に一流であること。あなた方はみんな一流でなくては。一流であると私は思うけれども、いよいよそうなつてください、第一流に、天下一品に。キリストはそれ以下のものではないんですから。私たちにくださるものは、もう他のものと比較することのできない驚くべき内容なんです、質なんです。

それだけのものを受けとらなかつたら、「福音」なんていつてもつまらないよな、いわゆる「私の信仰は」なんて言っているうちは。「信仰、信仰」といつて、私は嫌いなんだ、この「信仰」という言葉が、もう抹香くさくて。「信仰のみによつて」なんて、これがお題目になつてしまう。本当の人間であること、本当のひと、霊が止まる霊止^{ひと}であることです。

³⁰ 30 なんじ霊^{みたま}をいだしたまえば百物^{すべてのもの}みな造らる。

なんじ地^{あたら}のおもてを新^{あらた}にしたもう。

「汝の霊、キリストの霊、わが中に来たりたまえば、常に新たに展開してやまず」

と。いろんなことにぶつかつて、若い方は悲しんだり何だりする。そんなことでへこたれてはいかん。

「為^せん方^{のぞみ}尽くれども絶対に希望^{のぞみ}を失わず」

という。神さまは最善を考えていらつしやる。どんなことがあつても。失恋したつていいよ、結婚に破れたつていいよ、学校を滑つたつていいよ、大学を受けそこなつたつていいよ。



そういうことに遇えばあうほどいいよ力強くなっていたきたい。そのためには、

「患難、汝を玉にする」

という言葉もあるじゃないですか。いよいよ玉にしていこう。いよいよ玉成していこう。玉碎すれば玉成するんです。

「玉と碎けよ、しからば玉成するぞ」

と、逆説的なことを私は言う。

まず御霊の世界へ行くと、行き詰まりがないです、本当に。パウロが言うとおりです、絶対に。

「大道無門、千差路有り。此の関を透得せば、乾坤に独歩せん」

(大いなる道に入る門は無いけれども、その門はまたどの路にも通じており、この無門の関をつらぬいて大道に至ったならば、その人は大手をふって天地陰陽を歩くことができるであろう)

と、その通りです。

●「神・キリスト・我」という内接円

31 願くはエホバの栄光とこしえにあらんことを。

エホバそのみわざを喜びたまわんことを。

32 エホバ地をみたまえば地ふるい、

山にふれたまえば山は煙をいだす。

33 生けるかぎりはエホバに向かいてうたい、

我ながらうるほどはわが神をほめうたわん。

34 エホバをおもうわが思念はたのしみ深からん。

われエホバによりて喜ぶべし。

35 罪人は地より絶滅され、あしきものは復たあらざるべし。

わが靈魂よエホバをほめまつれ、エホバを讃称えよ。

キリストをおもう思いは楽しく、いよいよ深くなって、私はキリストによって喜ぶ。キリストに在って喜ぶ。「に在る」という世界。「のために」ではない。「にある」「イン」の世界。「汝のうちに」「汝の中に」なんだ。「神・キリスト・我」という内接円であります。

我々は大自然の中にある。そして大自然を呼吸している。空気がある。空気に包まれて、空気は私たちの中に入って、身体は、血液は空気によって清まっている。魂はいよいよキリストの中に、神の中に、霊気の中にある。これが祈りです。祈りとは、お願いではない。祈りとは、その中に入ること。キリストの中に自分を投げ入れることが祈りです。

「主よまー」

と言えば――



「南無阿弥陀仏！」

「南無妙法蓮華経！」

と言えど――その中に入ってしまう。どうしても、今までのありきたりの概念を突破しなければダメ。そうしたら、楽になるですよ、本当に。こんな楽なことはない。なにも力む必要はない。「私の信仰は」なんて力むことはない。「信仰」なんて言っていると、進行しないよな。

「仏法の大道は、一塵のなかに大千の経巻あり、一塵のなかに無量の諸仏ましまし。一草一木ともに身心なり。」

という。いい言葉だな。これは道元の言葉です。

「二つの草も、一つの木も共に私の身と心である」

という。草木と一つだ、みな仏性であると。

「山川草木 悉く仏性あり」
ことごとくぶつしょう

という。仏の世界でも一流の坊さんのものは本当に共感できる。御霊の世界ではつきり同じことだから。生命の延長です。

だから、ご飯をいただく時にも、神さまの生命の延長をいただく。そうしたら、本当に身になる。コレステロールなんていうのが起きなくなってしまう。こちらの身体にその霊的な質がないと負けてしまう。霊質が流れていけば、まあ癌にも勝ってしまうでしょうね、おそらく。

これでもいい言葉だね、あなた方も知っているとおりのうたです。

「天地の分れし時ゆ 神さびて 高く貴き駿河なる 不尽の高嶺を 天の原振りさけ見れば 渡る日の影も隠らひ 照る月の光も見えず 白雲もい行きはばかり 時じくそ雪は降りける

語り継ぎ言ひ継ぎ行かむ 不尽の高嶺は」(万葉集)

私たちにとっては、やまべのあかひと山部赤人がよんだように、富士山は日本の霊峰です。

西荻窪の高架線の上から私は富士山を冬になるとよく見ているんだけど。昔はここから富士山が見えたんですよ、本当にここは武蔵野でね。ところが、今はもう二階の屋根に行ってもダメだ。あそこに吉祥女学校なんて建ってしまったものだから。

富士山は本当に日本の象徴です。富士と桜――向こうではロールベール、月桂樹――それが天に向かって立っているような姿です。

どうぞ、そういうことで、自然を見直していただきたい。ただ見るのではなくて、自然と交わる。神の天然としての自然と交わる。ここに私たちの生命の表現、いや実には、木を見れば木となり、花を見れば花となる、溶け合う世界です。風を見れば風となり、雲を見れば雲となり、星を見れば星となり、月を見れば月となり、太陽を見れば太陽となる。成れますよ、そういうように。

「心に太陽を持て！」



というが、成ってしまう。もう光が入ってしまうから、影がない。本質的に影がなくなってしまう。ありがたいですね。

これはもうキリストに贖われたんですから、自我がすっ飛んでいるやつですから――あいかわらずに在ったってそんなことは心配いらぬ――いよいよ平伏して行くだけ、いよいよ入っていくだけ。肉体は、毎日ご飯を食べます。そのように、魂は毎日、聖書を食べなければダメです、この霊的食物を。聖書を食べることが、

「今日は魂が乾いてしまった」

といって食べるようにならなければダメです、魂が乾いても平気な顔しているようでは。お腹のすいた時だけ感じてね、魂の渇きは平気になっていたら、これはダメですよ。ではおしまい。

● 祈り

この天地万物、天然を創造し、そこにまた我々人類を冠としてお創りになった主さま！そのあなたの偉大なる御意とご計画にいかにもそわないところの現実であります、どうぞ、この福音が、いかにあなたを中心にし、キリストがそれを証された事態をいよいよ身につけて、主イエス・キリストと一つになること。イエス・キリストはまことに野のひとつの花を見ても、そこにあなたの栄光を見られました。そのように、私たちもまた、あなたの創られたものを友とし生命の延長として、一切をもつてあなたを讃美することが、恵みをあなたに帰し奉ることが、私たちのこの生涯の目的であることを、そしてまた、本来にあなたのこの事態をいかにもして、何をしようとも、現すことが、証しすることがこの生涯の目的であることをいよいよ身につけて進ましてくださいます。

兄弟姉妹たちの中に、イエス・キリストの霊宿り給う時に、一切に対する秘訣を得たりということになりますので、どうぞ、そのようにして、この一人びとりを、神さま、のつべきならぬかけがえのない一人びとりとして、いよいよお鍛えくださらんことを切に願ひ奉ります。

今日はまた新しい方もいらつしゃって、感謝であります。どうぞ、それぞれの所において祝福されますように切に願ひ奉ります。

今、尽くしませんが、心からの感謝と讃美、兄弟姉妹たちのそれと共に御名により捧げ奉る。アーメン。

